

## 寧夏訪問 旅行記 (2018年8月16日～21日)

\*写真のアーカイブは本文とは別にあります。148枚。文中の写真番号はその通し番号です。以下にはそのうち10枚の写真を貼りこんであります。写真提供は望月暢子さん。

\*\*\*\*\*

### 寧夏回族自治区の予備知識

寧夏回族(ねいか かいぞく)自治区の首府=銀川(ぎんせん)へは北京から飛行機で西へ2時間ほど。上海などからも飛行機が飛んでいる。ここは黄河の上流。遠大な景色。

中華人民共和国の国土は世界で4番目に広い。ロシア、カナダ、アメリカ合衆国に次ぐ面積。22の省、5つの民族自治区、4つの特別市(重慶や北京など)からなる。

寧夏回族自治区はそれらの省区の中で2番目に狭い。面積はちょうど日本の東北地方(5県)と同じくらい。

5つの市(地級市)からなっている。市は日本の県のようなもの。それぞれの市は日本の県と同じくらいの面積を持ち、人口は80万から220万。

かつてこの地で西夏王国が栄えた。李元昊。11～12世紀。唐・北宋の時代。西夏は西方の肅州・瓜州・沙州・蘭州まで支配し、1126年にモンゴル(チンギス・カン)に滅ぼされるまで強大だった。首都銀川の郊外に歴代皇帝の大きな墓跡がある。西夏はタングート族か?万里の長城の跡もあちこちにみられる。つまり、この地は漢族と異境との接点の長い



長い歴史の上にある。西夏文字の話は井上靖の小説『敦煌』に詳しい。

回族とは何かについては諸説ある。起源は相当に古い。唐から元の時代に、中央アジアやインド洋を經由して渡ってきたアラブ系・ペルシア系の外来ムスリムと、彼らと通婚し改宗した在来の中国人(主に漢族)にあると言われている。人口の半分ほどが回族。新疆のウイグル族とは由来などが違う。

基本はムスリムであること。が、彼(女)らは、毎日5回に西に向かってお祈りをしているか?女性は頭を覆っているかという点必ずしもそうではない。いろいろである。が、豚肉は食べない。これだけは徹底している。少し不思議。漢族と回族は生活習慣も外見も違うが、お互い違和感なく暮らしているのがよい。多文化共生とはこういうことだろう。

\*\*\*\*\*

### 客人歓待 (1日目 8月16日) 写真1～4

朝5人は羽田に集合。北京空港で寧夏大学・マルクス思想研究家の虎さんと合流。廣松先生と虎さんは「造反有理」「革命無罪」などと筆談で、文化大革命のことを話している。一緒に銀川へ。空港で楊森林さんの出迎えを受けた。楊さんは、今回の旅行の立役者である林燕平の古くからの友人。日本語も堪能。車で、呉忠市の楊さんの叔父(丁祥さん)の家に案

内された。

中国には客人歓待の文化が根付いているようだ。民族のるつぼであり、古くから敵味方に分かれて争いをしてきたのだから当然だろう。これまでの旅行記にもそのような記述が多くある。市街地にある一戸建て。丁さんは建設会社を経営していて、お金持ち。大きな家に住んでいて、広い居間を地域の音楽練習室兼演奏会場として開放している。「音楽好きの集まり」と表現していた。写真2(右)の左から3人目が楊さん、4人目が叔父さん。電子ピアノを弾いているのが先生。皆で次々と歌ってくれる。バイオリンやハーモニカなどの演奏も次々と。子どもの舞踏の披露も。週末に教室に通っているとのこと。皆が楽しくやっている雰囲気がとても心地よい。数多くの料理。おいしい！隅々まで気持ちがこもっている歓迎会を夜遅くまで堪能した(写真7)。



#### クコの実 中衛市(2日目 8月17日) 写真5~18

呉忠市のホテルで目が覚める。林(リン)さん率いる北九州組は上海で台風に遭って空港で足止め。朝になっても到着しない。私が心配そうにしていると聶(ニエ)さんが「林先生は修羅場に強いから、そのうち来ますよ」と言う。なんとなく納得。

今回の旅行の目的は寧夏の農業・農村視察。まず呉忠市のひとつ南の中衛市に移動。案内役は中衛市役所主任の劉学財さん。ワゴン車で運転手さんと共に案内してくれる。

最初は、中寧市鳴沙鎮でクコの実を大規模に生産・加工する会社(璽贊生態枸杞莊園)を見学。市内から1時間以上、車に揺られて行く。

農地はとにかく広い。東京ドームがゆうに10個は収まる規模。工場は体育館5つ分はある。それもそのはず、クコの実は寧夏の農産物の目玉であり、日本でもよく見かけるものだ。杏仁豆腐の上にひとつ乗っている赤い実といえば誰にもわかるだろう。

社長さん(写真15の左端)の案内で園内を回る。十何年ほど前に起業した。なんでも聞いてよいというので、「いくらお金がかかりました?」と聞いてみる。40億とかいう返事。とてもそんな額で作れるものではない。第一、主要道路から舗装した道が新たに5キロくらいはつけてある。と思いながら大きな看板(写真13)を見ていると、中国共産党、中衛市、人民解放軍と書いてある。この三者が一体になって進めているなら、そうでしょう。

収穫から出荷まで人手による作業が中心(写真8)。かなりの雇用を生み出しているように見えた。従業員の6割は回族という説明もあった。周辺の農家の若い人たちがバイクなどで通勤しているという。同規模のクコ農園が周辺にいくつもある。中国の近年の国策=農村の経済向上(都市と農村の格差解消)施策の一端であろう。

写真 17 (右) は私のお気に入り。望月さんと聶さんが妖精のような顔をして、クコの実を摘んでいる。



### 回族料理店 写真 19～20

いったん中衛市の市街地に戻る。昼食は劉さんの案内で回族料理店。回族料理店は多い。ほとんどのレストランはそのように思える。看板の左上に**清真料理 (中国版ハラール。寧夏が本場)**の認証マークが貼ってある (写真 20)。料理は牛肉のスープ。これがまたおいしい！

### 枝豆工場 写真 21～22

午後からは、劉さんの上司も参加で1名増。輸出用冷凍野菜加工会社を訪問。枝豆やインゲンを日本に輸出するほか、二十数種類の冷凍野菜を米、仏、韓に輸出している。これも規模が桁違いに大きい。この季節はもっぱら日本向けの枝豆。自社農地や近隣の零細農家から枝豆が次々に運び込まれてくる。地元のおじさんがロバに引かせて来たりもする。ここに売ればずっと値がよいとのこと。

一辺2メートルほどの大きなかごに入れられて、フォークリフトでベルトコンベアーに (写真 21)。選別・熱湯洗浄して、急速冷凍。畑での収穫から工場出荷まで4時間と決められている。無農薬、有機栽培の基準もある。大型の冷凍トラックで工場から運び出されて、1週間ほどで日本に到着するとのこと。使い勝手がよい冷凍枝豆はインゲンと並んでスーパーやコンビニで好評。

機械化が進んでいる。一部ドイツのシーメンスの機械を使っているがほとんどが中国製とのこと。日本の商社やニチレイなどがこうしたプロジェクトを進めているようだ。この会社はもともとは日本の商社が沿海部で立ち上げたビジネスで、そこの技術者が独立して寧夏で起業した。

少し前に中国野菜は残留農薬のことで日本で信用をなくしたが、こういう管理が徹底して、冷凍技術が高まると日本の近郊農業は危ないと思った。日本の零細な農家が太刀打ちできるものとは思えない。集約化・機械化・大規模化しようとしても、もう日本の農村に(若い)労働力はいない。この工場ではベルトコンベアーにたくさんの人がはりついて、忙しく働いていた。賃金は時給にして300円くらいと聞いた。

ベルトコンベアーから出てきた冷凍枝豆を食べさせてもらおうと甘みがあって鮮度がよい。私も次からこういう枝豆を買おう！

### 野菜基地 写真 23～25

続いて、野菜の栽培基地を訪問。日本の農業試験場に似た施設。が、やっていることはもっ

と実践的のよう。効率的な穀物・野菜栽培のノウハウを開発すると同時に、農家を招いて研修を行い、技術を習得させて帰す活動がメイン。そのひとつは、中衛市名産の硒砂瓜。硒はセレン(Se、原子番号 34)。これを含む砂利を畑に撒いて育てる方法をパネル展示していた。日本の西瓜栽培ではカリウムを含む肥料がよく使われている。ところ変われば品変わる。中国の農業は規模の大小を問わず粗放農業で、日本ではお馴染みのマルチ(マルチシート)は一度も見ることがなかった。

この辺りの標高は 1300 メートルくらいある。清涼な気候が西瓜栽培に適している。廣松先生は「中国に避暑に来たみたいだね」と言っていた。と同時に非常な乾燥地帯。ここでは西瓜は重要な水分補給源であって、これがないと人間は生きていけない。写真 79、93、94、106 も参照。We love Suika!

#### ナーサリー 写真 26~31

今度は花卉の生産工場。王軍さんという女性の主任さん(写真 30)が説明してくれる。大学で農業を勉強したという風の感じのよい人。農業技術開発有限公司。ここは花卉(園芸植物)の生産基地で、シャボテンやらスパティフィラムなどを大量に生産し、北京などの都市に出荷している。

ここの温室の大きいこと！ここは新幹線の車両基地ですか？と聞きたくなるくらいに大きい。天井や窓の開閉はすべてコンピュータ管理となっていて(写真 29)、最適の生育環境が保たれているという。

#### 養牛 写真 32~35

次は「寧夏香岩産業集団沐沙乳牛・肉牛養殖場」。読んで字のとおり、大量に牛の飼育をしているはずだが、私には何の記憶もない。牛の鳴き声や牛舎の臭いくらいは覚えていてもよいのに何も覚えていない。

圧巻だったのは敷地の入り口に置かれている巨大な牛のオブジェ。小山のよう(写真下)。

中国には超能力の動物がいると聞かすが、ひょっとしてこの牛は人間の記憶を食べてこんなに大きくなったのかもと思う。おそろしや。

案内してくれた女性の話だと、親子イベント(牧場体験)など、将来ここでのツーリズム事業の可能性も検討中だとか。

写真 34 で左手の畑の中に黄色いものが見えるのはひまわり。また来るね！と牛に手を振って、ここを去る。



### 「君に肉体があるとは不思議だ」 写真 36～40

第一日の視察メニューを終え、市内に戻る。ホテルの目の前に立派な蓮池を発見。まだ明るい。私たちも写真を撮りたくなった。写真 40（下）は、左奥から、望月敏弘先生（東洋英和女学院大学、中国現代史）、聶海松先生（東京農工大学、中国の人口・環境・食糧）、運転手さん（**実は市の農政庁の主任**）、廣松毅先生、山本泰（この二人は東大名誉教授）、そして市役所の劉主任。望月夫人（暢子さん、中国語の翻訳家）は写真 37（クコ畑の写真 17、3 ページの写真の左側にお顔）。東京からの 5 人組は全員寧夏は初めて。望月夫妻は中国語が堪能。夫婦仲がよくて好感もてる。聶さんは河北省の都会育ち。2014 年に北京出張中に急逝された若林敬子先生の弟子。

中国の景色には清楚な蓮の花がよく似合う。お釈迦さまが上に乗っているくらいだから。背景はヤナギ。楊とも書く。このあたりで目に付くもうひとつの樹木はポプラ。非常に背が高く成長し、西域では防砂林にもなる（ヤナギとポプラは分類学上は兄弟らしい）。街なかではアカシア（本当はニセアカシアで、両者は別種）も多い。春に白い花が一面につく。マメ科でフジのような花。これは他の都市でも見事な街路樹をなしている。



かつて清岡卓行は大連で、この花咲き乱れる並木の下を遠くから歩いてくる少女をみて、「君に肉体があるとは不思議だ」と呟いて恋におちた。美しいものは人を狂わせる。

### 火鍋料理 写真 41～46

この日のツアーのお礼を兼ねて、劉主任を誘って夕食に。街中を少し歩いて、火鍋料理店へ。店内は大変に賑わっていて満員だったが、劉さんの顔で個室に案内される。劉さんがささっと注文すると日本では見たことのないほど立派な肉や野菜の皿が運び込まれた（[写真 43](#)）。たいそう高価な夕食だったはずだが、**メンバーの**誰が払ったのかは忘れた。

### 夜市と毛沢東 写真 47～53

食事が終わって、街なかを散歩しながらホテルへ帰る。たくさんの店が路上にテーブルと椅子を出し、人であふれかえっている。夜市！ いったいどこにこんなにたくさん人がいるのかと驚く。このあたりの人は、よい季節は自宅で夕食を取らず、こういうところに出てきてわいわい食べるのが好きなのだそうで、大変な喧騒（[写真 48](#)）。

続いてもう少し歩く。今度は大きな広場になっている。歩道橋の上から見たのが[写真 51](#)。

正面に、毛沢東の巨大な像がライトアップされていた。こんな大きな毛沢東の像がまだ残っているなんて！「延安市（えんあんし）は陝西省（せんせいしょう）に位置する地級市。1937年から1947年まで中国共産党中央委員会が置かれ、この期間中に毛沢東の党内主導権が確立したことから、中国革命の聖地とされる」とウィキペディアにある。その陝西省は寧夏回族自治区の南東に隣接しており、今なお寧夏でも毛沢東は根強い人気があるとのこと。なるほど。

夜になって、ようやく北九州組が到着。林さんは疲れた疲れたを連発していたが、相変わらず元気そのもの。望月夫妻と聶さんがホテルで休んでいる間に、私と廣松先生は北九州組の10人と一緒にもう一度夜市へ。北九州の若者は元気。なんでもよく食べる。

### 黄河と砂漠（3日目 8月18日）写真 54～67

北九州組が合流してようやくメンバーが全部そろった。団長は小田國次さん。北九州市若松区ひびきのの自治会長。林さんがこの1年間北九州市立大学で客員研究員をして、農村調査をしていた時に大変にお世話になった縁。林さんは「中国の農村は日本から学ぶことがたくさんある」と言う。北九州組9人はひびきの地区の農家の人とJA北九州の若い職員。出発前に昨夜の毛沢東の話を少し補足。

\*\*\*\*\*

中国では三線建設とか三線都市という言葉が使われる。1960年代に中国政府は工場立地、とくに兵器工場を奥地に移すことに注力した。1964年にアメリカがベトナム戦争を本格化させた時期でもある。それまでの産業集積は沿海部に集中していたが、これを北京のあたりを通る南北の線＝2線、陝西省から雲南省にいたる線＝3線に大規模に移転させるという壮大な計画。アメリカによって沿海部の工業地帯が攻撃されることを恐れたからと言われる。寧夏はこの3線の上に位置しており、北部の石嘴山市（せきしざんし）において石炭産業などが発達し、鉄道道路網も整備された。石嘴山市はいまでも寧夏唯一の工業地帯。毛沢東は寧夏発展の立役者でもあるわけで、根強い人気の背景のひとつだと思われる。

\*\*\*\*\*

今日は大人数なので林さんがチャーターしたバスに乗ってホテルを出発。今日一日は砂漠見学と固原への移動。

午前中は、中衛市の国家AAAAA級旅游景区、沙坡頭（さはとう）へ。市街から1時間ほど。砂漠と黄河、ラクダ、雑技（サーカス）などが見ものの大型観光スポット（写真67）。黄河上流の流れに面している。お土産店がたくさん。ここはすっかり観光地。駐車場は満杯。人がぞろぞろ歩いているところは、上高地の河童橋のような賑わいだが、何しろ規模がまったく異なる。不思議なことに外国人は私たちだけ。他には一人も見なかった。

このあたりの黄河はかなり上流なので、多摩川下流の3倍くらいの幅。水量は多い。たっぷりと水をたたえていて、どちらに向いて流れているのかもわからない。このあたりの黄河は文字通り黄色に濁っている。ミルクティーのような色をしている。もっと上流の青海省のあ

たりでは透明だそうで、このあたりから下流は砂や土の成分を含んで黄濁している。つまり水の栄養分が豊かだということだろう。世界の4大文明の源。

観光地なので入場料を払って中に入る。ガイドさんは劉さんご指名の優れ者の女性。以前は公務員だったが、民営化されて給料が下がったとか。

まずは河の畔で羊の皮の風船で作った筏を見学。昔はこれを10個ほど筏に縛りつけて浮きとして使っていた。その頃はこの河を渡るのが大変だった(写真54~56)。敷地の奥に進むと、立派な書の石碑がたくさん。唐の時代以来の書という。雑技のミニ演技(写真57、58)などを楽しみながら歩いて、私たちもいよいよ砂漠の下へ。

砂漠はまるでスキー場のゲレンデのように上から迫っている。黄河に向けて急斜面。スノーボードで砂滑りを楽しんでいる子どもたちも多数(写真59)。

砂のスロープの中に掘られたエスカレータ(地中。とても長い)に乗って、てっぺんへ。絶景なるかな(写真60~62)。手前に砂漠、真ん中に大河、向こうに緑が一望に見られる場所は世界中ここしかないとガイドさんは誇らしげに言う。さらに、「ここに黄河がなければ、北京まで砂漠に覆われていたでしょう」と聶さんが通訳してくれる。聶さんはいつの間にかガイドさんがもっていた携帯ハンドマイクを身に着けていて、皆に日本語で案内をしている。

砂の話はぞくつとする。ここで黄河は中国を砂から守ってきた。常に川面から立ち上がる風が砂に吹き付け(上昇気流)、壁を押し戻しているの、砂はこれ以上は進めない。かつてカリフォルニアのヨセミテで、この渓谷は氷河の浸食によって100万年もかけて作られたものだという説明を聞いた時と同様の胸騒ぎが走る。私は高所恐怖症なので、崖の上から下を覗くことはできない。柵などは設けられていない。

怖がりの私はガイドさんに「この斜面って落ちたら下まで行ってしまわないのですか」と聞く。すると「ここの砂は粘りがあるので、落ちません」。そうか、井上靖がタクラマカン砂漠の砂はキメが細かくて、メリケン粉(小麦粉)のようだと書いていたことを思い出す。

崖の上は一面の砂漠。西のタクラマカン砂漠まで続いているのだろう。崖の上も観光地。雑技公演の大きなテント(パオのようなもの)、子ども向けの乗り物(砂漠ライド)、それに売店多数。すごい人だかり。中国の雑技(曲芸、サーカス)には長い伝統があり、上海雑技団は世界中で公演をしている。フラン



スの有名なシルク・デュ・ソレイユ (Cirque du Soleil) はそのマネと言いたくなるくらい優れているという。

ラクダに乗って砂漠に行くツアーは有名だ。大行列。観光写真にたくさんある通り。60 歳以上は乗れませんというのであえなく敗退。砂漠の上をしばらく楽しんだ後、高所恐怖症の私以外はみなリフトで下山 (写真 66、前ページ)。

### ロバの店 写真 68~73

お昼時になり、何を食べようかという話になる。劉さんが珍しいものを食べましようと言う。案内されたのは街道沿いのロバ料理専門店。郷村驢肉館。ロバ肉を焼いたものやスープ。野菜が豊富。司馬遼太郎がロバの顔はウサギのように小さくてかわいいとどこかで書いていた。それがこんなにおいしいとは！「ラクダはまずいが、ロバはおいしい」と劉さん。このお店はなにか異国の雰囲気。天井にはトウモロコシがずらり (写真 69)。写真 73 はひまわり。どちらも立派な食材。

中衛市の歓待がここまで手厚かったのには訳がある。中衛市の今の市長は、北京大学の博士で北京の中国社会科学院でポストドクをしたこともあるエリート。林さんが直接にアプローチして、お世話をお願いしたそうだ。中国では、縁(コネ)とトップダウンが重要。その後、中衛市を離れて、貸切バスで一路南へ移動。目的地の固原(こげん)市は、寧夏回族自治区の南の端。よく整備された幹線道路の窓に農村の風景が続く。大部分はトウモロコシ畑。これは家畜のエサですという。

私は車中で iPad を出して、Google Map で現位置を確認しながら移動。3 時間余の移動。道沿いの送電線を見て、小田団長(かつて電力会社に勤務)が、「これは 50 万ボルトの直流送電です。進んでいますよ」と教えてくれる。鉄道も並行して走っている。

### いよいよ固原！ 写真 74~75

ようやく固原市に到着。ここは林さんが農村調査に打ち込んだ地域。ホテルで少し休憩した後、暗くなった街中を地元の芸術協会まで歩いていく。

ホテル(固原賓館。一泊 188 元≒3200 円)。周辺の市街地も建物は立派だが、銀川や中衛と比べると貧相な感じ。人が少ない。夜に歩いている人もまばら。あちこちが工事中。農村地帯の真ん中にそびえる現代都市。

「帝豪商業広場」(プラザ)という真新しい高層ビルの中に固原芸術協会のオフィスがある。画家の王旭天さんほか芸術家の方々と交流。王さんが北九州組の中野夫人(ひびきのの野菜農家)の肖像画を描いてくれた(林さんが写真を送って、それを元に絵を制作してくれるように依頼してあった)ということで、その贈呈式となる。その後は同じ建物の上の階にある火鍋店にて皆で夕食。

写真 74 の後ろで幅広の帽子をかぶっているのは、近隣(西安)の大学の日本語学科で学ぶ学生さん。日本語で話をする。明日の駱駝村ツアーにも来てくれるという。写真 75 は夕食

のご馳走。野菜料理が豊富でうれしいが、あまりおいしくない。むむ。  
建物の入り口に「日本文化使節団、熱烈歓迎」の大きなバナー（横断幕）が掲げてあった。

### 万里の長城（4日目 8月19日）

一夜明けると、ホテルの目の前に万里の長城の跡が見える。万里の長城は様々な時代に築かれていて幾重にもある。固原にも幾重にもある。目の前の長城は、600年くらい前のものを修復して史跡としたもの。600年前は明の時代。元の後世。この頃も中国はモンゴルの攻撃に悩まされていた。

皆で登ってみる。城塞の階段の上の部分は修復されたもの。3メートルほどの幅の回廊。ここに兵士が詰め、外から攻めてくる異族の軍団に矢を構えていたのだらうと思いをはせる。

### 書を鑑賞 写真 76～80

今日もさわやかな晴天。今日のツアーには中国のテレビ局の撮影クルーが同行。六盤山書画芸術院を訪ねる。ここは馬正君さんがやっている書の博物館兼アトリエ。何万点の書のコレクションで、これだけ大規模なものは中国にも他にないという。国宝級とのこと。

書家たちが思い思いに筆をとって製作をしている（写真76）。赤やピンクの花は牡丹。真っ黒な字によく映える。書家のひとりに、「この墨ってどこの産ですか」と聞いてみる。すると墨汁のパッケージの裏をみて、「ああ、北京って書いてある」と言う。日本ではやれ唐墨だ和墨だとか、和墨は奈良産に限るとかとてもうるさいのに、中国にはそういうこだわりはないらしい。皆で館内を廻り、膨大なコレクションを鑑賞。

ひと回り見させてもらった後は、書の贈呈。中国で書の第一人者と言われる張峰さんの筆による「天廣松毅」が廣松先生に贈呈される（下の写真）。これは見事。高さ60センチ、幅2メートルはある。写真の右から2人目が張峰さん。一番左が林さん。別館にある馬さんの書齋に案内される。足元に西瓜（写真79）。立派な書齋。

説明や質疑。廣松先生がよいタイミングですっと立ち上がり、今回の歓待に対するお礼を述べる。行き届いたスピーチで、かっこいい！最後に、お土産として日本側全員が「室雅人和」の書を戴く（写真78）。



「室雅人和」とは、室（＝部屋）には「詩情画意」にあふれた風雅な趣があり、そこに集う人々は温かく和やかな心で満たされているという意味。家に対する主人の理想を表し、部屋

に掲げる扁額によく用いられる熟語。中国のネットで販売されている張峰さんの色紙作品は、なんと1平方尺(33.3cm 四方)あたり3000元(約51,000円)＝以上は望月さん情報。

「室雅人和」は「天廣松毅」より一回りサイズが小さいが、いったい幾らくらいするのだろう。ざっと計算すると60万円ほど。日本に帰って知り合いの書家に聞くと、張峰さんは日本でもよく知られているとのこと。2017年に日中国交正常化45周年を記念して張峰さんの書画芸術展が東京で開催され、来日された。元首相の福田康夫氏なども式典に参加。

### 駝巷村へ 写真 81～95

また同じバスに乗り、今度はだいぶ遠い田舎に出かける。今度は道が悪い。途中から道路工事のまっただ中を進む。山を削り道路を作っている。山の間をぬって揺れながら進む。2時間以上。目指すは固原市原州区張易鎮の駝巷(らくだ)村。ここはかつて林さんが長く住み込んで調査をした貧しい農村。

窓から外を見て、林さん曰く、当時(自分が調査をしていた頃)はこの辺りは禿山ばかりだった。皆が羊を放していたからで植生が破壊された。政府が羊の放し飼いを禁じたのでようやく緑が戻ってきた。そう言えば、そこかしこに松の苗木が植えられている。暑い。水を飲み飲み走る。

この村で待っていたのは、羊の丸焼きバーベキューの歓迎会。主催はこの村の出身で、町に出て事業を起こして成功した実業家で、林さんの友人(王建国さん)。どんなビジネスですか?と聞くと、LPGガスだという。それまで固原にはガスは入っていなかったが、ボンベでLPGガスを家庭や事業所に配達する事業が大成功を収めたとのこと。中国人の商才!

村の一角の空き地に天幕が張られ、細い道に何台も車が停まっている。道路の右側は回族、左側は漢族が住んでいるという。大きなベンツは王さんの車。王さん以下、十数名が忙しく準備をしている。村の女の人も鍋の前に立って忙しい。

日差しが強いので、一同は天幕の下に入る(右の写真)。ほっと一息。村の党支部長も迎えてくれる。このツアーに同行の火仲舩さん(前夜に訪ねた固原文芸協会の元会長)が歓迎の歌を披露してくれる♪。「緑の草むら、青い空、遠方から来た友、うまい料理にうまい酒。よきかな、よきかな♪」。心のこもった最高のもてなし。

この日のごちそうは羊の丸焼き。煉瓦で作ってある竈のオープン(小屋ほどの大きさがある)の中で火を焚き、アツアツに焼く。そうしたら火を取り出して、そこに上から羊を吊るして入れて蒸し焼きにする。羊は丸



の姿ではなく開いてあり、前日から香辛料などを擦り込んで味つけがしてある。焼けるのを待ちながら、スープなどを食べ始める。写真 87は一緒にいた子どもたち（望月先生の子どもではない）。ここに来た子どもたちは服も洒落ている。

いよいよ、羊が窯から出される（写真 88）。社長さんは、今日は今までになくよい焼け具合とご機嫌。みな一斉に嘯り付いて、満喫する。

写真 91の聶さんの前に見えている赤いたばこの箱に注目。卓の上に用意されていた。ずばり「中華」という銘柄で中国の最高級たばこ。お店で買ってみると 70 元ほど。つまり 1000 円。中国のたばこは全部こんなに高いのかということはない。100 円程度のものもたくさんある。安いものはどれもいがらっぽいだけで味がしない。そうか、中国は大変な格差社会なのだ。お金持ちと貧乏な人の暮らしはこんなにも違っているということだろう。**近所に商店やスーパーはなく、どうやって暮らしているのだろうと思う。**

### 村人と再会 写真 96～106

満腹になって、いよいよ村の中へ。

林さんは集落のあちこちに案内してくれる。家屋は畑のなかにある程度まとまって点在している。畑はたいていはトウモロコシ、あるいはジャガイモ。10 頭ほどの羊を連れて家に帰ってくる人もいた。家はだいたい煉瓦で作られていて、土か煉瓦の**外塀**に囲まれている。50 坪程の敷地。**塀**の中には庭があり、ネコがいたりする。世界中どこにでもある零細農家と思う。道沿いに学校らしき建物も見える。**静かな農村。**

この村では、屋根の上に太陽熱温水器を乗せている家が目に付いた。2015 年と書かれているものがあるのでその頃に入ったのだろう。写真 100は太陽光でやかんのお湯を沸かす仕掛け。

通りがかったひとつの家の中を見せてもらう。塀の中でどんな生活をしているのだろうか？ 門を入ると、左手に農機具などが置いてある。その向こうに台所や洗濯場とおぼしき建物。右手にも一棟。庭を横切って奥の母屋のような棟を覗かせてもらう。大きな居間のようなところで、子どもたちが大きなベッドの上に寝そべったりしている。テレビもあったように思う。屋根の上に小さなパラボラアンテナを載せている家もある。林さんが調査した頃と比べて生活は大いに向上したと言えそうだ。

村役場（共産党支部）を訪ねた。突然の訪問だったからか、何しに来たかという感じで押し問答になる。「こんな遅れたところを見に来て何がおも



しろいか」という剣幕だったそうで、聶さんが必死で対応。黍か何かの穀物を敷地の地面に撒いて乾燥させていた（写真 97）。聶さんが後で言うに、「あそこにいた役人は地域に対する愛情も誇りもない」。地元の人たちが、外の人の視線をひどく気にしている。

写真 98 は中国によくあるトイレ。男女の区別はある。聶さんはこれが大の苦手という。写真 99（前ページ）は村人に挨拶をして、お土産を手渡す林さん。この広場で会った人たちは村で一番貧しい人たちという。こういう付き合いは大切。ほとんどの人が林さんを知っている。いろいろな顔をしている人がいて人種のるつぼという感じ。子どもも靴を履いている。

### バスの旅 写真 106～108

バスで悪路をまた延々と揺られて今朝来た固原の市内に戻る。ホテルに到着してすぐ、林さん以下の北九州組はバスで出発。途中一泊して明日の朝、銀川から北九州へ帰る。東京組と北九州組が一緒にいたのは 2 日余りと短かったが、大人数の長旅はとても疲れた。日程がタイトだった北九州組はさぞのことだろう。

残った 5 人はホテルの周りをぶらぶら歩いて、レストランで食事。本当は近くにある有名な博物館を見たかったのだが、もう閉まっていた。近所に高層マンションのような建物がたくさんある。空にはきれいな上弦の月。みな疲れて早く寝る。

### 須弥山を訪ねる（5 日目 8 月 20 日）写真 109～135

固原で 2 泊目となった昨夜のホテルは素晴らしかった。習近平も宿泊した西港航空酒店固原店（308 元≒5300 円）。清潔で明るく一番モダン。中庭は西洋庭園のようでベンチが置いてある。特にうれしかったのは初めてクレジットカードが使えたこと。中国は電子マネーの普及が著しく、幹線道路のサービスエリアの売店でもスマホで支払いができる。が、クレジットカードは不可。現金から一気に電子マネーの世界に入ってしまったようだ。だが、このホテルは航空会社の系列のようで、さすがに使えた。しかし英語は使えない。今度の旅行で英語が使えたのは飛行機の客室乗務員くらい。

昨日バーベキューをご馳走してくれた社長さん（王さん）手配の車で、少し離れた国家 AAAA 級旅游景区、須弥山（しゅみせん）に向かう。市街から北へ 50 キロ。石窟と言えばガンダーラや敦煌が有名だが、ここもなかなか見ごたえがある。須弥山は古代インドの世界観の中心にそびえる山の名。

まずは、須弥山石窟群の入り口にある建物の受付に行く。ここで入場料を払う（王さんの運転手さんに払ってもらう）。立派な歴史博物館となっている。

まずはそちらを拝見してから。廣松先生と私は博物館の入り口ではしゃいでいる（写真 109）。ここは立派な施設。中に入ると、曼荼羅図や西域街道の電子地図、シルクロードの宿場の復元展示、発掘資料、たくさんの仏像、そして立派な玉（ヒスイ）などが見栄えよく整理・展示されている。ちゃんとみれば何日もかかると思えるほどに充実。

一応見終わって、階段を上がって地上に出ると、青空の下、雄大な景色。真正面に大仏と無数の石窟が見える（[写真右](#)）。その配置の見事なこと！

小さなバスに乗って、石窟の方に移動する。周りの景色も壮観（[写真130](#)）。



ガイドさんの案内。写真 114～121 は目の前で見た石窟。無数にある。古くは北周の時代（6世紀）のもの。

石窟は当時のお金持ちの寄進によるもので、この頃そういう習慣があったという。敦煌も同じ。石窟や仏像を作るための職人・作家が近隣に住み、街をなしていた。石窟は僧侶の修行の場であり、時には住み込んでいた（[写真118](#)）。

石窟は大小あるが（[写真119](#)）、おおむね6～10畳くらいの広さで、天井が高い。何体かの大きな仏像（立像）が座の上に置かれていて、壁や天井には極楽の絵、鳥獣や当時の人間の姿が描かれている。ひとつひとつに番号が付されて管理されている（[写真125](#)）。時代は唐の頃まで様々。インドから伝えられた歴史の記録のかたまり。ここを経て日本にも仏教が伝えられた。

後世になって人手によって傷められた仏像や壁画もたくさんある。イスラム教徒は仏像の顔を削り取ってしまう。[写真126](#)の仏さまの顔には真っ黒に煤がついている。これは、1950年代の毛沢東の大躍進の時期に兵隊が寒さしのぎに石窟の中で火を焚いたから。

ガイドさん曰く、「ここも風化が進んでいます」（[写真124](#)）。仏像の顔も外に面しているところは、風にあてられてはすぐ磨滅している。千年にわたる風の力の怖さを知る。

1920年に寧夏で発生した海原大地震（マグニチュード8.5）で大きな被害を受けた。大仏の大きな庇は近年復旧されたもので真新しい（[写真129](#)）。ふと見ると、ガイドさんは梨のような果物を持参して丸かじりしている。風と乾燥の国は果物の国。

仏さまの顔も体も風でどんどん削られている。風が吹いている。これらもいずれはすべて砂に帰するのだろうか。

帰りがけに初めて日本語を見る。「日本の皆さま、須弥山へようこそ！」と入口本館の外壁に大きく書かれている。これが今回見た唯一の日本語。この日は日本人は誰もいなかった。

### 豆もやしとの出会い 写真 136～139

須弥山を出て、街道から少し入った小さな町の一角にある回族料理店に立ち寄る。写真136はもやしの野菜炒め。小扁豆（[レンズ豆](#)）のもやし。これは固原の特産で、林さんのイチオシ。おいしくいただく。[写真136](#)が伝説のもやし。

砂風にまみれての見学だったので、食事の前に手を洗いたいと申し出る。するとお店の人はどこからか器に水を汲んできて、店の前の歩道で手に水をかけてくれる。これが固原の流儀。つまり、溜めた水は不衛生で、流水しか使わないということ。

#### ドライブ 写真 140～142

その足で固原からの帰路につく。2日前と同じ幹線道路を呉忠市へ。朝から乗せてもらっている王さんの車。中衛市を越えて、4時間くらいの長旅。途中のパーキングエリアで何度か休憩(写真 140～141)。聶さんと私は停まるたびにアイスを食べている。聶さんは最初は「中国で生ものを食べるとお腹をこわすかも」と引けていたが、平気で梯子をするようになる。いつもスマホのピッで私の分も払ってくれる。

写真 142 (写真右) は街道沿いのモスク。望月先生は中国でモスクの写真は撮ったらまずいかなと言っていたが、車窓から思い切ってカシヤ。



#### 爆買い 写真 143～144

ようやく呉忠市のホテルに帰着。夕方 5 時を過ぎていた。聶さんのお目当ては、街中の大きなお土産店「寧夏(呉忠) 優質特色産品展示展銷中心(展示販売センター)」。聶さんは、このセンターには 1000 種類もの寧夏のお土産が揃っていると言っていて、興奮気味。爆買い。ご主人や家族の食糧を大量に仕入れる。大きなお店だが、写真の通り、中に人はほとんどいない。閉店時間を過ぎていているところを無理に入れてもらったからかもしれない。

#### 寧夏のワイン 写真 145

楊さんの従兄弟の明明(ミンミン)さんが最近開業した回族レストランを訪ね、野菜中心の夕食。たしかにご馳走ばかりの旅だった。

初日に歌と音楽で私たちをもてなしてくれた楊さんの叔父さん(丁さん)も合流。この社長の話をたくさん伺う。世界の秘境を探検するのが趣味ということで、あちこちに行った時の冒険談が面白い。写真 145 は地元ワインを手にご機嫌の社長さん。寧夏に限らず中国北西部(西域)では昔からブドウ栽培が盛ん。

10 年ほど前にフランスからワイン用の苗木を買い、醸造所も作った。フランスから職人も招いた。曰く、「気候もよい。ブドウもよい、でもワインの質がもうひとつだ」。そりゃあそ

うでしょう。ちゃんとしたワインができるようになるには100年はかかります。  
その場でムスリムの話になり、盛り上がる。楊さんたちは回族。つまりムスリム。明日の朝  
モスクに案内しましょうと言ってくれる。楊さんは1987年から駒場で筒井若水先生の指導  
の下で長く学んだが、福島原発事故の後いったん帰国し、今は行ったり来たり。お子さんが  
日本の大ファンだとか。

#### モスクへ (6日目 8月21日) 写真 146-147

外はまだ暗い。楊さんについて住宅地の中を少し歩いて、モスクに到着。大変に立派なモス  
ク。銀塔清真大寺 (写真 146)。朝のお祈りに次々と人が入っていく。楊さんは小さな白い  
帽子を出して頭に被る。望月さんと聶さんはスカーフをまとっている。

私たちはおっかなびっくり建物の中に入り、後方の床に座る。さっそくコーランが始まる。  
幹事のような人が抑揚をつけてコーランを唱え始める。みながそれを復唱し、立ったり床に  
伏して頭をついたりするのを後ろから見ている。キリスト教会とは違って、コーランの本を  
手にしている人はいない。よく唱える箇所はだいたい決まっていて、誰もが暗記している  
という。それにしても、アラビア語のはずだから、どの程度意味が分かっているのだろう。10  
分ほどで礼拝は終わる。

ムスリムのしきたりとして、両耳の後ろに親指をあて、指をひらひら動かすというのがある  
のを知る。これはアラーの言葉を注意深く聞く仕草ということ。

別棟のイマーム (指導者) のオフィスに案内される。恰幅のよい穏やかな男性で、お茶を出  
してくれる。少し談笑する。望月さんがこのモスクのお金はどう廻っているのですか？とい  
きなり突っ込んだ質問したのはぎくつとした。イマームは「それは会計係がやっています」  
とさりりとかわす。うまい答え。このモスクの宗派を聞くのは忘れた (たしかスンニー派)。  
ホテルで少し休んで、荷物をまとめて出る。空はもう明るい。

聶さんは昨日爆買いしたお土産をスーツケース 2 つ (大きい) に詰め込むのに悪戦苦闘し  
ていたとか。楊さんの車で銀川空港まで送ってもらう。飛行機は北京へ。

#### 思い出す 写真 148

「羊も食べた、牛も食べた、ロバも食べた。北京ダックが食べたい」と私が駄々をこねる。  
北京での乗り継ぎ時間の中に、聶さんが空港内の中華料理店を探してきてくれる。5人で食  
べる。本場の北京ダックは肉もしっかり食べさせてくれるのがうれしい。

口に入れながら、望月さんが「山本先生が北京ダック北京ダックって言うなんて冗談と思っ  
ていました」と言う。すかさず聶さんが真顔で「先生は冗談は言いません」と返す。これが  
大層可笑しかったので、今回の旅行のユーモア冗談大賞の金賞を獲得。

テーブルの上のお酒は紅星二鍋頭という白酒 (写真 148)。今回の旅行で飲んだビールはど  
れもあんまりだったので、これを口に含んで、「ああ、よかった」と思わず言ってしまう。

機上のコーヒーもおいしかった。この5日間飲む機会がなかったので飢えていた。

林さんとの長い長い付き合いを思い起こす。

林さんは 1954 年の北京生まれ。63 歳。共産党の幹部の家のお嬢さん。

日本に私費留学生として来たのは 1989 年。東京大学（駒場）の総合文化研究科関連社会科学専攻で統計学・経済学を学ぶ。文革世代で、大学（北京師範大学）でもほとんど教育を受けていない。大学時代は農村で働かされていたという。従って東大の大学院に入っても、日本語も英語もろくに出来ない、社会科学の本なども読んでいない。いわばゼロからの出発で、99 年の博士学位取得まで大変に苦勞した（指導する側も苦勞した）。

大学院生室が私の研究室の近くにあったからか、よく私の部屋を訪ねて来た。ある時は弱気になっていて、ある時は指導教官と喧嘩して怒りに体を震わせていた。

指導教官は何度か交代して廣松先生は 3 人目。研究テーマは中国の地域間所得格差。特に教育に注目している。この点は先見の明があった。日本でも日本経済評論社から日本語の書籍が出ている（2001 年）。中国でも何冊か本がある。

日本に来て、まずは本郷の近くでアパートを探した。敷金礼金が高くて、ご主人と二人で長い間働いて貯めてきたお金はそれで全部使ってしまった。仕方なくアルバイトに励んだ。朝暗いうちから弁当詰めの仕事。日本語が出来なくてもできる仕事。仕事が終われば大学へという生活。寝る時間がないので、ついつい寝坊してしまう。

ある日社長さんに呼び出された。「あなたは真面目な人なのにどうして遅刻するのですか?」。訳を話した。貧乏で寝る時間もない。するとなんと社長さんは目覚まし時計を買ってプレゼントしてくれた!

「この時計は私の宝物です」と林さんは言う。今でも大切にしている。林さんはこうした善意の日本人とめぐりあい、支えられてきた。私も日本人のひとりとして誇りに思う。

博士号を取得後帰国して、中国の最高学術機構である中国社会科学院に職（終身）を得た。北京勤務の後、寧夏（銀川）の社会科学院の副所長を勤め、2003 年から 15 年間固原の駱駝村に住み込み、農家を訪ねて調査に打ち込んだ。貧しい農民の生活支援にも取り組んだ。初等教育の義務化、学校での無償給食や暖房・図書室の整備など、林さんの提言が政府の施策に活かされた例がいくつもある。

今回の旅行で、私たちは中国の多くの方々になんでここまで?と思うくらいたくさんお世話になった。林さんは、日本で多くの人に支えられ育てられたように、中国でもたくさんの人に支えられ、かつ多くの人を育ててきた!

聶さんは「林先生の周りには情の厚い人しか集まらない」と言う。ということは、私たちも情に厚いということかも。それもうれしいが、何よりこの有意義な旅行を発案し、周到に準備し、道中あちこちに昼夜連絡を絶やさず快適な旅を演出してくれた林燕平に、一同の最高の感謝の気持ちを送りたい。

羽田に着いて荷物を受け取り、再会を約して 5 人組は解散。聶さんはご主人が迎えに来ていて、爆発寸前の大きなスーツケースを手にしてうれしそう。家族へのお土産が一杯。留守中お子さんたちは北海道にキャンプに行っている。明日迎えに行くという。

気がつけば、聶さんはすっかりお母さんの顔になっていた。

\*\*\*\*\*

文責は山本泰

文中で[写真 7](#)、[写真 15](#)のように青色の下線文字になっているところはリンクが張ってあります。オンラインで見ている人は、青色の文字を右クリックして「新しいウィンドウで開く」を選択して写真をご覧ください。45 枚（2020 年 4 月追記）。